

十番切

季は	地は	ツレ	(女)	ツレ	(女)
五月	駿河	シテ	曾我十郎	シテ	二宮
		ツレ	曾我五郎	ツレ	曾我五郎
		ツレ	新開荒次郎	ツレ	新開荒次郎
		ツレ	新田四郎	ツレ	新田四郎

「是は二の宮と申す女にて候。さても曾我兄弟の人々
は。親の敵討たんとて。幼少竹馬の昔より。野に
臥し山に臥し。心を尽し給ひしかども。終に願ひ
も空しく過ぎさせ給ふ。今日御狩場の御供に紛れ。
ねらひ給ふ御心の内。押しさかり参らせて。わら
はも遁れぬ中なれば。御宮仕の隙を窺ひ。人々を
導びき申さんとて。忍びて是まで参りて候。

地 「何くにかおはすらんと。かなたこなたと尋ね行

く。心の内ぞ痛はしき。

二人カル

「兄弟はかくとも知らで。仮屋の前にたゞめば。

女 「さればこそこなたへと。さて国々の武士の。幕の
内を委しく教へ参らせ。あれこそは人々の。尋ぬ
る人の幕ぞとて。懇に教へ申し。命めでたく候
はゞ。又こそ御目に懸らんと。

地 「涙と共に立ち別れ。く。稻葉の山の峰に生ふる。
松とし聞かば今一度。帰り来んと約束し。又御前

へぞ出でにける。く。

十郎詞
「かくて兄弟の人々は。二の宮の教により。祐経が

仮屋に忍び入り。

地
「年月の妄執。今宵こそ晴し給へ時致とて。思ふ敵を討つたりけり。

五郎詞
「其時々致立ち帰り。如何にや祐経たしかに聞け。

箱根山にて我に得させし此太刀。只今返すぞ受け取れとて。心もとに差し当て。踊り上つて打ちけ

ければ。果報いみじき祐経も。二つになりてぞ失せにける。

地
「宿直の人々あわて騒ぎ。く。すはや夜討は曾我兄弟ぞ。起き合へやつといふ声に。弓よ長刀太刀よ刀と。前後を失ひ。上を下へと返しける。

地
「されども御前の人々は。く。我もくと切つて出で。面も振らず懸りければ。本よりも兄弟は。命も惜しまず切つて出で。兄弟が手に掛けて。や

にはに三騎討ちけるを。すかさず追つ詰め懸りければ。今は命限りの切死と。仁王立に立ち並べば。御前の武士は合ひかねて。其間遙に引いたりけり。

新開
「かゝりける処に。新開と名乗つて。

地
「祐成に討つてかゝりければ。得たりやあふとさんぐに。畠みかけられ叶はじと思ひけん。小柴垣を押し破つて。後這しつゝ遁れ入りければ。時致は遁さじと。御前をも憚らず。逃げ行く敵を目に

懸けて。跡を慕うて追うて行く。(中入)

新田詞
「然る処に新田の四郎忠綱は。君の仰せに隨ひ。仮屋の前後を警固して居たりしが。見れば十郎祐成。血刀振つてまつしぐろに打ち入りけるを。

地
「留めんと思ひ打ち合ひけるが。無慙や祐成は。宵より疲れし事なれば。新手に責め立てられ。受太刀に為つて弱り行くを。畠みかけて打ち伏せつゝ。太刀押し拭ひ鞘にさし。心静に立ち帰る。

「無慙なるかな祐成は。臥したる枕より。如何にや
如何に忠綱。我も遁れぬ中なれば。他人の見る目
恥かしや。はやく討ち取り。後の世弔ひてたび
給へ。時致はかくとも。知らで便や失はん。死出
の山。三途の川も一所にと。誓ひし事も徒に。早
是までぞ首打てや。南無阿弥陀仏と合掌す。

キリ地
「移れば変はる世の習ひ。今日此頃も膝を組み。互
に隔てぬ中なれど。武士のはかなさよ。切らで叶
はぬ輪廻のきづな。南無阿弥陀仏と。首打ち落し
取り持ちて。御所へとてこそ参りけれ。く。